

軟白長ねぎ

担当者 技能研究員 三上 益由

試験課題名	品種比較展示圃
目的	本町に適した多収・高品質・良食味の品種を選定し、生産者への普及に資する
期待される成果	地域適合複合栽培による高品質生産並びに労働生産性の向上を図る
連携機関	上川農業改良普及センター士別支所 JA北ひびき和寒基幹支所 和寒町蔬菜組合連合会長ねぎ部会

1 供試品種・資材

品種

※元 蔵 (武蔵野種苗) 白妙 (渡辺採種場) 金長3号 (ホクレン)
北の匠 (タキイ) 『下仁田 (大学農園)』 ※基準品種
『参考調査』

2 耕種概要

土 壤 ~ 灰色低地土、埴壤土

前 作 ~ 夏秋キャベツ

播 種 日 ~ 3月23日 定 植 日 ~ 5月15日 収 穫 日 ~ 10月6日

栽 植 密 度 ~ 畦幅80cm×株間5cm 25,000/10a当たり

面 積・区 制 ~ 1区 8m×0.8m=6.4m² 160株/1区あたり 反復あり

3 土壌診断結果と施肥量

(1) 土壌診断結果

(mg/100g)

pH	EC	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	CaO	熱水抽出N
6.86	0.077	44.1	50.1	85.1	605.7	6.7

(2) 土改資材と堆肥 (kg/10a)

堆 肥 ~ 2,000kg

(3) 施肥内容 (成分量/%)

基 肥 ~ N S 2 6 2 (12 - 16 - 12 - 0) 5月15日 全層施肥

分 肥 ~ S 4 4 4 (14 - 4 - 14 - 6) 7月 7日 側条施肥

(4) 肥料の要素量

(kg/10a)

		N	P	K	Mg
基 肥	N S 2 6 2 80kg	9.6	12.8	9.6	-
分 肥	S 4 4 4 40kg	5.6	1.6	5.6	2.4
合 計		15.2	14.4	15.2	2.4

4 調査項目

生育調査 ~ 播種日・発芽期・発芽率・生育日数

収量調査 ~ 全長・生葉数・軟白・全本数・規格内割合
規格内収量・調整率・平均一本重

5 生育調査

項目	品種	元蔵	白妙	金長3号	北の匠	下仁田
播種日		3月23日				
発芽期		4月3日	4月3日	4月5日	4月5日	4月4日
発芽率(%)		97.0	94.3	88.3	90.7	97.6
生育日数		197日 (収穫日 10/6)				
全長(cm)		81.3	76.0	85.0	84.9	61.8
生葉数(枚)		11.1	10.9	11.1	11.2	9.0

6 収量調査

項目	品種	元蔵	白妙	金長3号	北の匠	下仁田
規格内収量(kg/a)		328	270	333	308	248
調整率(%)		65.0	78.3	75.6	76.6	41.6
平均一本重(g)		131	108	133	123	99
軟白(cm)		28.6	31.5	27.6	28.7	19.5
規格内割合(%)	3L(4~5本/kg当たり)	20	0	10	20	0
	2L(6~8本/kg当たり)	50	30	60	40	20
	L(9~11本/kg当たり)	30	70	30	40	80

7 病虫害防除履歴

殺虫剤			殺菌剤		
6月17日	アディオン乳剤	3,000倍	6月17日	ダコニール1000	1,000倍
			8月31日	アミスター20フロアブル	2,000倍
9月18日	スミチオン乳剤	1,000倍	9月18日	ポリバリン水和剤	1,500倍

8 試験結果概要

(1) 生育経過

- ① 育苗は3月23日ハウス内に直播をした。発芽期は4月3日に元蔵・白妙が迎え、1日遅れて4月4日に下仁田、更に1日遅れて4月5日に金長3号・北の匠となった。
- ② 定植は5月15日に行った。土塊のやや粗いほ場であったため、根の活着が遅れ初期生育も悪く心配されたが、その後は順調に回復し、10月6日に収穫した。

(2) 収量調査結果

- ① 全長調査では、金長3号が85.0cmと最も長く、次に北の匠 84.9cm > 元蔵 81.3cm > 白妙 76.0cm > 下仁田 61.8cmという結果となった。
- ② 規格内収量は、金長3号が333kg/aと最も高く、続いて元蔵が328kg/aとなったが、昨年の試験での4品種平均 881kg/a と比較すると大幅に減収となった。調整率は白妙が最も高く78.3%、次に北の匠が76.6% > 金長3号 75.6% > 元蔵 65.0%となったが、参考調査品種の下仁田は41.6%で最も低かった。
- ③ 軟白の長さは、白妙が31.5cmと最も長く、次に北の匠が28.7cm > 元蔵 28.6cm > 金長3号 27.6cmとなり、参考調査の下仁田は19.5cmという結果となった。

(3) 考察

本年度の5品種平均収量は 297kg/a となり、昨年度の平均収量の三分の一程度にとどまった。原因としては、土壌条件の悪いほ場での定植となったため初期生育不良がみられた。加えて、8月下旬頃からべと病・黒班病等の病気もひろがり収量低下につながったと考える。

次年度は、病気の発生の少ない品種の導入・効果的な防除体系をとり、収量の増加・品質の向上を目指したい。